

『満漢並香集』 訳注（四）＊

荒木 典子

はじめに

前号に引き続き、『西廂時藝 雅趣蔵書』の満文訳『満漢並香集』訳注第四章に入る。

明刊本（王季思(1957)）では、張生が、美しい鶯鶯に比べて見劣りする自分を嘆く第一本四折「鴈児落」に“小子多酬多病身,怎當他傾國傾城貌”（我は多愁多病の身、どうして彼女の傾国傾城の容貌に当たれよう）という一文が見える。『並香集』第四章では、“我是個多酬多病身,怎當你傾國傾城貌”（我は多愁多病の身、どうしてあなたの傾国傾城の容貌に当たれよう）として、これに基づいた八股文形式の文に満文訳を付している（この部分の異同については省略する）。

なお、大木(2006:25-44)にて、この八股文形式の文章について、詳細な解説と日本語訳が施されている。この部分で大量の『詩経』他からの典故が用いられていることを指摘し、詳細な註を施しているため、語句の出典に関してここでは詳しく述べないことにする（漢文に対する満文の解釈の問題に関わる場合は引用した）。

本文の前には浣溪沙の詞が見える。

金聖嘆批評『西廂記』「鬧齋」の概略は以下の通りである。

二月十五日、普救寺の長老、法本が鶯鶯の父である崔相国の法事を行う。張生も法本の親戚で、自らの亡父母の追善という体裁で参列させてもらう。夫人、紅娘とともにやってきた鶯鶯を見た法本以下僧侶たちはあまりの美しさに驚き、動揺する。そのありさまは“勝似鬧元宵”（元宵節の賑わいにも勝るほど）であった。張生は鶯鶯への思いを募らせるが、夜が明け、法事が終了し、鶯鶯らは部屋へ戻っていった。

なお、今回より【凡例】は省略する。『満漢並香集』訳注 (一) ～ (三) を参考されたい。

転写と訳注・第一冊 (第四章)

- 28a1 bing hiyang ji bithe >
 並香集
 並香集
- 28a2 duici fiyelen >
 第四章
 第四章
- 28a3 doocan be facuhūraha
 道場を混乱させた
 鬧齋
- 28a4 jabšan de doocan-i bade bahafi eletele tuwafi
 幸運にも道場のところで 十分に見ることを得れば
 何幸齋壇看十分
- 28a5 hoton be haihabumbi > gurun be haihabumbi seci
 城を傾け倒す 国を 傾け倒すというのは
 傾城傾國果然真
- 28a6 yargiyan mujangga >> hojo be buyeme tuwarangge uthai
 本当にもっともだ 美貌を欲して見ることはすなわち
 冤家¹貪覲是鶯鶯
- 28a7 ing ing inu >> ayan mukiye fi hiyan gilgafi
 鶯鶯である 蠟燭が消え線香が灰になり
 燭滅香消空影靄
- 28b1 elden šanggiyan untuhuri ombi secibe doocan facaha

光と煙がむなしくなるといっても 道場が解散した
道場散後兩

28b2 amala juwe ishunde dolori buyenduhe >> korsorongge
後 二人互いに心の中で愛した 悔やまれるのは
留情 鶏聲可

28b3 coko-i jilgan abka gereke seme hūlara de >>
鶏の声が 空が 夜が明けたと鳴くから
恨報天明

28b4 dergi ucun-i gebu wan hi ša
左の歌の名は浣溪紗
右詞 浣溪紗

29a1 bi serengge > emu gasara mannga > nimere manga beye >
私というものの一人の悲しみがち病みがちの身
我是個多愁多病身

29a2 ini gese gurun be haihabure > hoton be haihabure
あの人のような国を傾け 城を傾ける
怎當他傾國傾城貌

29a3 arbun de adarame hamire >>
姿にどうして敵う

29a4 arbun-i saikan be buyerengge nememe beye karmara
(張生が鶯鶯の) 姿の美しさを愛することで かえって身を守り
慕其貌之美者 轉慮身之難持

- 29a5 mangga jalin jobombi >> jang gung ni beye > labdu gasara
がたいために苦しむ 張珙の身 大いに愁い
焉 夫張之身因崔之貌而多
- 29a6 nimerengge ing ing ni arbun-i haran de ohongge
病んだことは 鶯鶯の姿 (を見たこと) のせいだ
愁病身
- 29a7 te sabuha be dahame > karmara mangga jalin joborakū
今、見たので (心身を) 守りがたいために苦しまな
今一見之 能勿慮其難持哉
- 29b1 ome mutembio >> ainci ini gūnin > abka-i niyalma be
くなることできるか おそらく彼の心 天の人を
若曰² 天之於人
- 29b2 tuwara babe > yargiyan-i ulhici ojurakū kai >> daci
見るゆえんは本当に理解することできないよ 前から
誠不可解也 以
- 29b3 hairara buyere niyalma be > holconde ishunde ucaraha de >
愛しいと思っている人と 突然互いに出会ったら
素所愛慕之人 而邂逅相遇
- 29b4 gūnin kek sehe gese oci acambihe >> tuttu seme daci
気持ちはすっかり満足し心になう しかしながら
情幾慰矣 然 以
- 29b5 hairara buyere niyalma be > holhonde ishunde ucaraha manggi
愛しい人と 突然互いに出会ってから
素所愛慕之人 而邂逅相遇
- 29b6 gūnin elemangga karmame muterakū de isinaha >> adarame
心をかえって守ることできなくなるだろう なぜ
情轉難持矣 何則

-
- A blank coordinate plane with a horizontal x-axis and a vertical y-axis intersecting at the origin. The axes are represented by thin black lines.

- 30b2 mini gūnin cihai ušabuci ombi sembihe >> mini araha
私を思うままに引き込める 私は作られた
足令我情牽耳 我之佇立
- 30b3 alin de kejine ilire de > gūnin inu cin-i šuleo
山にしばらく立って思うことはまた螭の鬚の毛
湖山⁶也 亦謂螭首蛾眉
- 30b4 o-i faitan > fularjame emhun tutame bihengge > hai tang
蛾の眉 顔を赤くして一人取り残されていた 海棠の
溶溶而疏倩⁷者 不減海
- 30b5 ilha-i gese eletele sulahangge ci eberi akū > ini
花のような 十分に残ったのより劣らない 彼女の
棠之睡足⁸也 他
- 30b6 arbun > mini gūnin cihai guribuci ombi sembihe >> ini
容姿 私を思うままに動かせる 彼女の
之貌 足令我意移耳 而
- 30b7 arbun fuhali uttu gurun be haihabuha > hoton be
容姿 とうとうこのように国を傾け 城を
不圖他之貌竟傾國傾城如是也
- 31a1 haihabuha be gūnihakū >> te emgeri acaha be dahame >
傾けたことを思いもかけなかった 今既に会ったからには
今既觀止
- 31a2 ini arbun mini beye > juwe ishunde teisulehe >> ere
彼女の容姿 私の身 二人互いに釣り合った これは
而他之貌 與我之身 而相值也 豈
- 31a3 abkai buhe salgabun waka oci ai >> emgeri sabuha be
天の与えた運命ではないか 既に見た
非天假之緣 亦既見止

- 31a4 dahame > mini beye > ini arbun > ishunde sangka be
からには私の身 彼女の容姿 互いに離れることは
而我之身 與他之貌 不相間也
- 31a5 akū oho >> ere juru buyecuke-i acabun waka oci
ないだろう これは一對の美しい出会いではないか
豈非兩美之合
- 31a6 ai >> uttu oci minde yargiyan-i jabšan bahakū
そうであるならば私は本当に幸せを手に入れたのでは
而 我不誠幸也哉
- 31a7 semeo >> udu tuttu seme mini ere gasara mangga > nimere
ないか とはいえ私はこの悲しみがちで 病み
雖然 其如我之多愁多病何矣
- 31b1 mangga babe adarame ombi >> mini gasacun aibici jihe
がちであるのをどうしたらいい 私の愁いはどこから来た
夫我之愁 何自來也
- 31b2 seci > hocikon saikan asihan gege be > erehujehei mujilen
と 端正で美しい若いお嬢様を 眺め続けて心が
婉孌季女 望之而心焉
- 31b3 jobome suilara de > gasarangge esi seci ojarahū ereci
憂い苦悩したので 愁いはひとりでにこれより
忉忉 愁不禁自此多矣
- 31b4 hir sehe⁹ >> te fujurunga yangsangga saikan arbun >
ひいひいいうほどになった 今雅やかな麗しい美しい姿
今佳冶窈窕
- 31b5 dere acafi ishunde sabuha de dahame > seibeni faitan-i
顔を合わせて互いに会ったので 昔、眉の
覲面而相逢 向之眉上愁

- 31b6 sidende jibsibuha gasacun > ainci subumbi dere >> tuttu
間に積み重ねた憂いを願わくば解きたいのだ しかし
庶幾解乎 然而
- 31b7 seme giru lakcafi banin colgorokobi > ainaci yang
ながら風格群を抜き容姿群を抜いている おそらく楊
國色天香 楊
- 32a1 fei-i nure de goiha arbun > duibuleci mangga ayoo
貴妃の酒に酔った姿も（これと）比べたら敵わないのではないかと
妃醉容 恐難比倫也
- 32a2 erebe dartai šara jakade > gasarangge hihūn budun-i
これをわずかの間見たので 嘆き 疲労が
睽言顧之 則愁有悒悒而頻添者
- 32a3 emdubei dekdehe >> mini ere gasara mangga beye > lak seme
しきりに生じた 私のこの愁いがちな身は ちょうどまく
夫以我多愁之身 而值
- 32a4 saikan gege jureri bisire be tunggalabuci > tede
美人の前にいることに思いがけず出くわしたならあの人に
佳人之在望 其何
- 32a5 adarame dosome hamimbi ni >> mini nimeku > aibici baha
どうして耐えられるか 私の病はどこから生じた
以堪此乎 我之病 何自昉也
- 32a6 seci > tere buyecuke mergen gege be > gūnihai mujilen
あの愛すべき聡明な姫君を思う心
彼美淑姬 思之而勞心
- 32a7 suilame gusucuke de > nimerengge hercun akū ereci
苦しみ愁いに耐えないので 病は知らないうちにここから
悄兮 病不覺自茲多矣

- 32b1 hing sehe >> te eldengge fiyangga sain banin > emu
ずきずきしてきた 今燦然たる色鮮やかな良き姿と一つの
今秀質芬芳 聚
- 32b2 boo de asame bihe be dahame > ne-i niyame jaka de
部屋で一緒にいたことにより 今の心臓の隙間に
處於一堂 迹之心頭病
- 32b3 hūsibuha nimeku > ainci dulembi dere >> tutu seme
つつまれた病 願わくば治ってほしいのだ しかれども
庶有瘳乎 然而
- 32b4 biye burubufi ilha gidebuhabi > ainci u gurun-i
月を消し花を隠したという おそらく呉国の
妒月羞花 吳宮舞
- 32b5 gung ni maksire hehe > elen akū aise erebe
宮の舞う女で（やっとな彼女に）十分かなうのではないか これを
女 羞堪上下也 薄
- 32b6 majige tuwara jakade > nimerengge murhu farhūn-i nememe
すこし見たので 病んだ人事不省のますます
言觀之 則病有懨懨而轉深者
- 32b7 nonggibuha >> mini ere nimere mangga beye > tob seme
増やされた私のこの病みがちな身 ちょうど
夫以我多病之身 而適玉
- 33a1 gu-i niyalma gaitai isinjiha be teisulebuci > tere
玉人の突然の到来に出くわしたのなら それで
人之遙臨 其
- 33a2 adarame beye bargiyatame mutembi ni >> neneme fan wang ni
どうして身を正すことができるか 前に梵王
何能自持乎 前此 梵王宮前

- 33a3 gung ni juleri alifi bisire de > yasa bai emgeri šara
宮の前で耐えていたので 目をただ一度見た
凝眸一眺
- 33a4 dabala elden be beye umai bahafi cicilahakū >> te-i
だけで光を自分は全く仔細に見られなかった 今の
未嘗親炙其光耳 茲
- 33a5 urhuri haihari yabume jihengge be tuwaci > ini
ひらりひらりと歩いてきたのを見れば 彼女が
之蹣跚而來者 幽
- 33a6 haihūnga icanga -i marira forgošoro de > fayangga
しなやかに快くめぐりまわるので 魂が
揚婉轉 即欲
- 33a7 udu tuherakū oki sehe seme > bahanarakū >> ere u
いかに倒れないでほしいといっても不可能だ ここは巫
不魂消 而不得 非巫峽
- 33b1 hiya alin -i nikagu¹⁰ > tugi yabuha > aga yabuha su
峽山の …… 雲が過ぎた 雨が過ぎた 素
山頭 彷彿素娥之雲雨
- 33b2 o endure-i adalingge wakao >> tuttu seme mini ere
娥の神によく似たものではないか しかれども私のこの
而 我愁病
- 33b3 gasara nimere emteli songko < ai gelhun akū siyang
愁い、病、孤独な足跡では どうして思い切って襄
孤踪 怎敢比襄王之夢耶
- 33b4 wang ni tolgin de duibuleci ombi >> neneme beye-i
王の雲に匹敵できる 以前月の
前此月下

-
- A blank coordinate plane with a horizontal x-axis and a vertical y-axis intersecting at the origin. The axes are represented by thin black lines.

- 城を傾けたのだ 国を傾けたのだ かわいい
傾城矣 傾國矣 可
- 34b1 niyalma si > atanggi teni mini gasacun be surumbume
人あなた いつようやく私の嘆きをなだめて
意種 何時得慰我愁而藥我病耶
- 34b2 mini nimeku dasame jidere >>
私の病を治しに来るだろう
- 34b3 mujilen-i dolo gosime > angga-i dolo jobome > gisun
心の中で慈しみ口の中で憂える 言葉
心中愛 口中憂 意
- 34b4 ice goicuka bime gūnin lakcafi ferguwecuke >>
新しく適切で 心断ち切って奇とすべき
新穎 而夭矯
- 34b5 aga niyengniyeri alin be dulere jakade > luku
雨が春の山を通り過ぎたので 茂った
雨過春山 茂
- 34b6 weji niohon saikan ohobi >> wen jang inu
林 青く美しくある 文章もまた
林青翠 文有此致
- 34b7 tenteke arbun bi dere be forime mangga seme
そのような姿である 机を叩き能力があると
得不拍案叫絶
- 35a1 ferguwerakū ume mutembio >>
驚嘆しないことは決してできない

参考文献

【日文】

大木康 2006 『原文で楽しむ明清文人の小品世界』 集広舎

【中文】

傅曉航・編輯校点 2013 『西廂記集解・貫華堂第六才子書西廂記』 甘肅人民出版社

王季思・校注 1957 『西廂記』 古典文學出版社

[注釈]

*本研究は [JSPS 科研費 JP19K00578](#) の助成を受けたものです。

1 冤家:恨みを抱く相手、仇、または愛する人。ここでは鶯鶯のこと。『満文西廂記』に“可意冤家” gūnin de icangga hojo 「意にかなう美しさ」とある。

2 若曰:大木(2006:30)によると、“若曰”から本文の最後までが張生の言葉になる。

3 堪:これを“甚”と見間違えたため、umesi と満文訳されたのではないだろうか。

4 待考。

5 可意種:自分の心にかなう人。ここでは鶯鶯のこと。『満文西廂記』でも buyecuke jaka とする。

6 湖山:太湖石で作った築山。

7 溶溶而疏倩:“溶溶”は①水勢の盛んなさま、②広大なさま、③明るく白いさま、“倩”は容姿が麗しいの意味。大木(2006:31)では「(蛾眉が) 揺れ動き美しいさま」と解釈する。満文は合わないようである。

8 不減海棠之睡足:海棠の睡り足るに減ぜざる。大木(2006:32)では次のように述べる:

楊貴妃の故事。玄宗皇帝が沈香亭に楊貴妃を召し出したところ、貴妃はまだ酔いから醒めていなかった。そこで玄宗皇帝が「真海棠睡未足耳（まことに海棠が眠り足りないようだ）」といった（『冷齋夜話』に引く『太真外伝』）。

“海棠之睡足”が楊貴妃そのものを表している。満文は楊貴妃の、酒が体内に残った状態に焦点を当てた解釈だろうか。

9 hir sehe:福田昆之『満洲語文語辞典』では hir seme 「(1)ひいひいと、(2)きりきりと」、とする。河内良弘『満洲語辞典』では hir seme 「身も世もあらず。ひらすらに痛哭する貌」とする。待考。

10 待考。

11 非:満文には訳出されていない。

12 sirebu-なら「糸を撚らせる」になるが漢文にはない。